

第15回東アジアスポーツ科学学会 (in 蘇州) に参加して

高野千春

中国・蘇州大学で開かれた第15回東アジアスポーツ科学学会 (East Asian Sport and Exercise Science Society : EASESS) に、今回初めて参加した。毎年八月八日 (末広がりのでめでたい日) を開会日とする、漢字圈的遊び心を持ったアットホームな学会で、中国、韓国、日本で持ち回り開催されており、今年度は上海万博と重ねて中国開催となった。今回一緒した東京農工大学の田中幸夫先生は大学の先輩でもあり、住まいも近く、中高年者を対象とした健康運動指導という共通のテーマを持つことから共同研究となり、「高齢者における気功呼吸法実践者の末梢循環応答について」というタイトルでポスター発表をした。発表の概要は、以下の通りである。【高齢者気功呼吸実践者に緊張型とリラックス型のイメージを想起させ、指先静脈血管の幅とヘモグロビン値および脳波を測定した結果、緊張型イメージ負荷では、気功呼吸法実践者はほぼ同様の末梢血管収縮反応を示し、リラックス型イメージ負荷では、長い経験を持つ実践者で血管拡張応答を示し、脳波も沈静化している状態が観察された。これらの結果から、気功呼吸法実践者においては、イメージによる中枢神経系の活動が再動脈機能に影響を与える可能性があるものと思われ、さらに長い経験が、中枢-末梢の上手な連携を強めているものと推察される。】日本人の発表の多くは医学や運動生理学・生化学系であったが、韓国や中国はスポーツ文化やスポーツ社会学、あるいは競技スポーツのマネジメントといった研究が多かった。地元中国での「気功」に関する発表なので不安とともに質問に期待をしていたのだが、反応は意外にあっさり… このような発表は、ヨーロッパやアメリカの方が興味をひくのかも知れない。学会全体を通じて、韓国人の英語のコミュニケーション能力の高さを強く感じた。

蘇州は、古くから絹織物で発展した歴史的な都市であり、運河による水運が生活に溶け込んでいて、どこか懐かしい雰囲気を醸し出していた。会場となった蘇州大学自体もイギリス風の素敵な建物だったが、その周辺に世界遺産の園林や歴史のある塔などが点在しており、学会の合間にも歴史を堪能することができた。

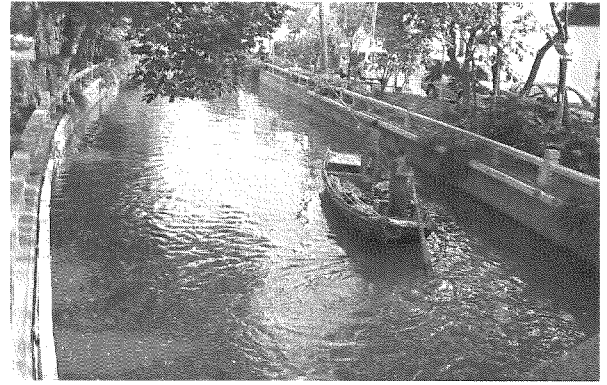
一方では、空港と見間違えるような巨大な蘇州駅とその周辺の開発工事が行われ、ベイサイドエリアには近代的なビルとイルミネーションが輝き、幹線道路には多少の傷あり自動車と音も無く走る電気自転車 (自動車以上に怖かった!) が溢れかえっていた。

中国滞在中は毎朝ホテル付近の散策に出かけたのだが、蘇州では午前6時、上海では午前7時になると、ちょっとしたスペースに中年女性 (なぜか女性だけ…) が十数人集まり、音楽に合わせて1時間ほど体操をしている風景が見られた。楽しげにおしゃべりしながらの人もいれば、一人で黙々と身体を動かしている人もいたが、皆気持ちよさそうな汗をかいている様子。中国といえば公園で太極拳! というイメージがあったのだが、日本の夏休みの「ラジオ体操」といった印象であった。上海のホテル近くで楽しそうに体操をしているグループに仲間に入れてもらい、見よう見まねで一緒に体操を試みた。動き自体は決してハードではないがさまざまな身体の使い方が組み込まれており、1曲5分程度のものを数曲続けて約1時間動きっぱなし、全身をしっかりと動かし、かなりの汗をかく体操だった。全く英語が通じずジェスチャーでのやりとりだったがとても好意的で、2日目の朝には体操終了後に一緒に朝食を買いに行った。(中国では朝食は作らず、揚げパン、野菜を包んだピリ辛のクレープのようなもの、麺類、小さな饅頭などを屋台のようなお店から買って帰り、家で食べるらしい。)

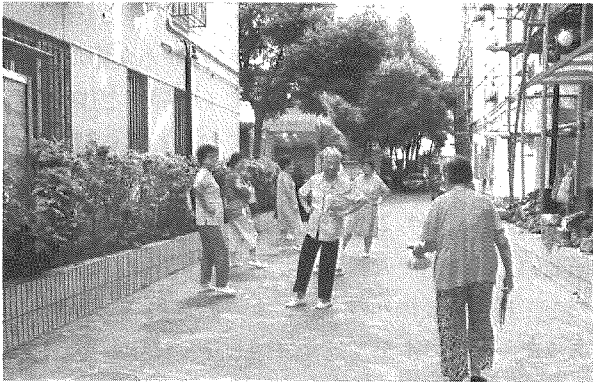
蘇州でも上海でも予想以上に英語が伝わらず駅や飲食店でいろいろと失敗もしたが、慣れてくれば地下鉄の表示は漢字で見やすく、券売機 (窓口では全くわからず!) で購入して地下鉄で移動する方が、言葉の伝わらないタクシーを利用するより安心で楽になった。料理も比較的日本人受けする味だったので、食い意地の張っている私には食文化も十分に楽しめた。今回の学会参加は、初めての海外での発表の体験であると同時に、中国文化の一部を直接肌で感じることできた貴重な体験であった。



学会会場の蘇州大学



旧市街地の運河（蘇州）



朝の体操風景（上海）